世田谷村日記

石山修武

八月一日

十時大学院最終レクチャー。午後二、三件打合わせ。今日から日記の形式を変えるトレーニングをする筈なのだが、事実（現実）と非現実が混濁したようなスタイルにしてみようかと考えている。

アポロ十三号の故障についてのゼミの報告を聞いている。猪苗代湖鬼沼前進基地計画は宇宙船の設計と同じようなものだ。宇宙からのエネルギーを受容して、それを人間の為のエネルギーへと変換する。太陽光、風、水のエネルギーの備蓄および宇宙船状のミニマム・スペースの接地装置のデザインを考案中なので、アポロ十三号の事故の件がとても気になっている。何故ならば自然との共生がテーマではなくって、閉鎖されたシステムが故障したのを治癒することからうまれる進化した形式が考えられぬかと考察中だから。

建築が最小限の重量によって達成されるならば、基礎という形式も変化するだろう。本当に軽量化された建築はその表現を一新するに違いない。

八月二日

気だるい土曜日である。晴れなのか曇りなのか解らぬような天気だ。川合健二から天候の変化は何故起きるのかについてエネルギー保存の法則から説かれた事を思い起こしたりしてみるが、要するに水の問題なのだ。水が水蒸気になり、雲となる。雲が微妙に太陽の日照時間他を変化させてしまう。それが天候の変化になる。水は水蒸気として、もう少し論理的一貫性を持ってくれなくては困るじゃないか。天候が微妙に変化して予測もつかぬと言う事で、どれほど我々の生活が影響されているか計り知れぬものがある。変化と言うのは天候であってもエネルギーの運動そのものが表現されているわけで、人間の生活はその運動と共にあるもう一つの運動、あるいはささやかな振動のようなものだ。シェルターというのは、それでは何か。二つの性格の異なる運動を仕切る壁なのか、フィルターなのか、それとも単なる屋根でしかないのか。フィルターくらいのレベルのものは猪苗代で作ろうと思う。

午後十勝ヘレンケラー記念塔の付属セミナー棟の、まとめのエスキスをしていたら、突然別のアイデアが生まれてしまった。積算も出て、盆明けには土工事にかかろうというスケジュールなのに困った事だが、どう考えてみてもこのアイデアの方が良いのだ。丘の上のノアの方舟のようなもので、開拓者の家を大きくして、半分にカットして、上半分をデッキにして、そこにガラスのシェルターを架けるというもの。０シェルターと猪苗代のアイデアが合体したようなモノだ。大急ぎでスケールを入れて本格的な検討を始めた。コレでゆくしかないな。Ｎ棟に引っ越してきた柴原にアイデアを説明して図面にするのを頼む。十六時半頃。マ、しかし、こういう事があるから設計は面白いのだが、金もうけにはならない。設計図はほとんど全部出来上がっているのに、頼まれもしないのに全て捨ててやり直そうというのだから、頭がおかしいと言われても、誠にそうですと言うしかないね。メールをチェックしていたら、何と驚いたことに、自業自得大明王からのメッセージが入っていた。誰かのいたずらにしては念が入ったもので一

時を楽しんだ。地獄の二丁目のＩＴカフェからだという。勿論へべれけの文体でその酔い乱れ方が中々エレガントなのだ。佐藤健の知人を幾たりか思い浮かべてみたが、こんな文体ねつ造出来る人物は思い当たらず・・・・・。まさか、本物かこれは。ついにＩＴは地獄との交信も可能にしたのか。以下に恐らくは念の入ったいたずらに違いない文面の一部を記す。

「地獄圏二丁目幽界東郵便局裏のもぐりのＩＴカフェ「花一文目」から送信です。こちらに来てから早、半年程になる（実際には七ヶ月）。死んでみれば何と他愛のないもので、こちらはそちらの世界と何変わらぬ鏡世界のようなもので、チョッと明度が足りぬ位で、しかもこれは発電所のスタイルが古いだけの理由。生きている時に附合っていた奴は皆当然のような顔をして皆居てやがるんです。みんな、みんな写るんです。コッチの人はみんな写真好きでねェ。それでも大歓迎されると思いきや、誰も驚きもせず、無愛想なこと、面々である事おびただしい。しかも死んでみたら、遊びでつけた戒名「自業自得大明王」がこちらでは大変な話題になっていて、六ヶ月程連日ＴＶ、新聞、週刊紙に出ずっぱり。休むヒマもない位。つい先週も志ん生、枝雀と二時間のトーク番組に出たばかり。枝雀はこちらではウツも消えて、本当明るくなって。笑いの巨匠二人を相手に、それでも何とか受けてやろう、受けたいと願うばかりに頭を使い過ぎて、今は少しばかりグッタリ気味で、酒もついつい飲み過ぎで、酒といえばこちらの酒には銘酒というのが無いの。どういうわけか、みんな一律の二級酒。これでは、こちらでも又、病気になってしまいそうな感じの今日、この頃です。・・・・・」

かくの如きいたずらに手持の時間を割いてくれる御人がいるだけでも嬉しいが、もし出来得れば、こんないたずら、度々やっていただきたいものだ。手の込んだ事に地獄に行った佐藤健氏とやらは、思い立って亡者の幾たりかの幽界インタビューとやらを近々始めるとも言っている。そんなところもまっことじっとしていられない佐藤健らしくて、この遊び人は相当な粋人だと思われるが、正体明かさず、しばらく遊んでやっていただきたい。私も退屈な日々だから。

八月三日

今日は日曜日である。世田谷村の二階でうたた寝をしたり、屋上菜園に上ったり、のんびり過ごしている。良い風が吹き込んでいる。菜園は背の丈に倍する位にのびた草々の匂いが満ち満ちている。唐辛子を少しばかり採る。

午後　ウトウトしたり、村上春樹のアンダーグランドを読み直したりで過ごす。夕方、家内と烏山商店街を歩く。

変な行列が商店街のスピーカーから大音響で流される音楽に合わせて踊っているのと遭遇してしまった。アンダーグランドを読んだばかりだったので、コレワ、オウム真理教かと緊張したが、何の事はない商店街の連中の夏祭りのパレードであった。しかし、商店街文化というのはかくも気恥ずかしく、得体の知れぬものなのかね。オウム真理教の象踊りの不気味さと何ら変わりはない。道の両側から眺めている我々見物人も皆、少し白けて、変な汚物を見ている目であった。烏山にはオウムの残党の拠点もあるのだから、商店街の連中は余程気をつけていただきたい。

麻原彰晃のキッチュ好み振りは、激しいものがあった。教団幹部達のユニフォームのカラーやデザイン、その他街宣パフォーマンスの凄惨なお下品振りは漫画文化をデフォルメしたような趣さえあった。村上春樹が指摘するように、それは我々が意識して目

をそむけなければならぬ類のものであった。ワイマールのヒットラーの比ゆを村上は用いている。確かにヒットラーが好んだというワイマールのエレファントホテルのテラスでの演説の舞台はある意味ではヒットラーが嫌ったバウハウスの近代デザインとは異なる、ドイツ文化の歴史的なニュアンスを含んだ、伝統的文化が産み出した都市の風景だった。（ワイマールは日本では京都・奈良の如き都市だ）ワイマールのヒットラーのパフォーマンスにドイツ民衆はたやすく扇動され、知識人は無力だった。

　烏山商店街の夏まつりにギョッとして、村上春樹のアンダーグランド、そしてワイマールのヒットラーまで思い起こすのは、はなはだ無理もある。しかし、例え商店街の夏まつりであっても祭りは祭りだ。儀式である事にちがいはない。その儀式の異常なキッチュ振り、脈絡の欠如振りは、チョッと麻原彰晃を思わせるモノがあるな。戦後半世紀ズッーと銭金だけでやってきた商店主達のお里は要するにこれ位のものだと言う事だ。ダイヤ・スタンプを生み出し、美容院の数が都内有数とも言われる烏山商店街の商人達の文化度は、かなり痛切にもの哀しいものではあるな。